

## 《2》21世紀を生きる子どもに求められる「学力」とは

はじめに

本稿に科せられた課題は、今日的な視点からとらえる子どもの「学力」について、平易な表現に心がけながら述べることである。

専門書を紐解くことで容易に回答が得られそうなこの学力について、あらためてここで説明の場を持つのは、それなりの訳がある。最大の理由は、いわゆる「学力低下問題」の登場だ。

周知のとおり、研究者や専門家達は、今日に至るまで各々の視点からこの問題を取り上げ、精力的に議論を展開してきた。ある研究者は、「子どもの学ぼうとする気持ちや姿勢」を問題にし、また別の研究者は、「階層間格差」の視点からこの問題を論じるといった具合に……。

そんな多面的な議論は、関係者間ではまさに望ましい姿であるのだが、一般市民の視

点に立つと、その問題の内実がどうにもよく分からないという状況ではないのか。だから、マスコミが伝える情報そのままに、「今の子どもは、学力が低下しているんだ」という漠然としたイメージを創り上げてしまう。

さらに、そのように判断する人それぞれが、学力について異なったイメージを持っていく可能性が高いことが、その問題をより複雑にしているのだろう。そこで、今一度「学力」の整理を……ということになるのだ。

本稿では、このような現状や問題意識の上に立ち、より多くの人の学力の理解に資することを目指して、この問題の現状とその周辺、今後の目指すべき方向性について、若干の考察を加えてみたい。

また、分かりやすさにも配慮して、マスコミ等で取り上げられた話題や身近な情報等から、論を展開していくこと

を試みる。すなわち、社会的な風潮や現象を読み解く事から、「学力」そのものの考え方に戻っていくような流れで本文を進めてみたい。

## 1 「学力」とは知識の量なのか？

先に述べたように、「学力」に関する話題がこれ程までに注目されるようになったのは、いわゆる教育機関関係者を中心に、現代の子どもの学力低下に関する議論が広く巻き起こった事に起因する。

この議論が一般に知られるようになったのは、1999年に大学の研究者達が著した「分数のできない大学生」<sup>(1)</sup>という書物の主張に端を発していると言われる。その主な内容はこうだ。「昨今の学生は、分数等の計算力が不足していて、大学で補習の授業をしなければならぬほどである。この事態こそまさに学生

の学力低下であり、由々しき事態だ」というように。

当然、これだけではない。近年公表された「INSISとPISA」という学力に関する国際比較調査の結果<sup>(2)(3)</sup>（詳細は後述）が、その議論に拍車を掛けることになったのも、記憶に新しい出来事である。

特に、2004年12月に発表されたPISA（2003）の調査結果は、諸外国との国別比較における順位の下降傾向<sup>(4)</sup>として大きく報道され、関係者の間では「PISAショック」<sup>(5)</sup>と称される程に影響を与えた事態となった。

国際比較調査の結果が以前に比べて下降傾向にあることは、素人目に見ても望ましいことではない。成績は下がるよりも上の方が称賛に値するし、上位の方が国際的にも優位な位置を確保できそうな、そんな安心感すら覚えるのだから。

これらの国際比較調査の結

加藤 圭司

横浜国立大学教育人間科学部助教  
横浜教育改革会議  
教育内容部会専門委員

資料1 OECD-PISAの調査結果に関する報道記事

※2004年12月19日の朝日新聞朝刊に掲載されたものから、一部を抜粋している。

順位	読解力	得点	数学的リテラシー	得点	科学的リテラシー	得点
①	フィンランド	546	日本	557	韓国	552
②	カナダ	534	韓国	547	日本	550
③	ニュージーランド	529	ニュージーランド	537	フィンランド	538
④	オーストラリア	528	フィンランド	536	英国	532
⑤	アイルランド	527	オーストラリア	533	カナダ	529
⑥	日本	522				
⑦	香港	515				
⑧	リヒテンシュタイン	505				
⑨	リトニア	498				
⑩	日本	498				

果を受けて、政治家や官僚、経済界から、次のような意見が出された。「資源のない我が国が経済的発展を為し得たのは、紛れもなく技術力である。この点で、次世代を担う現代の子どもが、学力低下や知離れ、科学離れを起こしている事態は、国家の発展という視点から看過できない問題である。早急な対策が必要だ」と。いわゆる「科学技術創造立国」の視点からの言及である。

そして、その議論の矛先は、国の方針である現行の学習指導要領における学習内容の削減（厳選）等、「ゆとり教育」に向けられたのであった。国際的な地位や競争力、あ

るいは世界屈指の技術力の継承と発展という国の政策それ自体は、およそ疑う余地もないものであろう。しかし、学力低下問題をその範疇だけにとらえ語ってしまうのは、いささか単純化し過ぎに思えるのだがどうだろうか。なぜなら、この論点から見出される学力とは、学校で教える知識や技能の量と質であって、これらを格段に向上させることが、最良の解決策になると考えているからである。

だが、実際はどうだろうか。今の学校や子ども達の間には、それだけでは解決できない様々な問題が横たわっている。あまり表に出てきてはいないのかもしれないが、「新しい荒れ」と言われる「小1プロブレム」や「小学校からの学級崩壊」、「学習意欲の減退」による「不登校発生率や中退率の増加」など、子どもの生活や生活そのものの危うさを端的に表す現象が、学校現場やその周辺で確実に拡がってきている。このことを、「学力」という点からどのように考えたらよいのだろうか。

ともかく、この科学技術立国の議論からの垣間見える学力観が、「獲得している知識の量」にあるということ。すなわち、「何を知っているか、

何ができるのか」を問う立場であることを、第1番目の学力のとらえ方としてここで明記しておこう。なぜなら、これが、昨今の風潮の中で多くの市民がイメージするものでもあるからだ。

しかし、一方で「考える力は学力じゃないの?」、「自分を表現する力はどう?」等々、素朴な疑問も次々と浮かんでくる。

これらの疑問を解決していくためには、先の国際比較調査が役に立つのかもしれない。なぜなら、「学力」に関する国際比較調査「なのだから」

## 2 学力に関する国際比較調査は、何を測定しているのか?

先にも一部触れたように、近年報告されている国際比較調査は、TIMSSとOECD-PISAの2つである。

TIMSSとは、国際教育到達度評価学会(略称:IEA)が実施している調査で、1970年の第1回調査以降、10年程度の間隔で実施されているものである。今回は、その第3回目にあたる。

調査の主な趣旨は、「学校カリキュラムに基づいた学習内容を、子どもがどの程度習得

しているかを調査するもの」である。対象科目は算数・数学と理科、対象学年は小学校4年生と中学校2年生だ。

この調査の特徴を簡潔に表現するなら、「小・中学校で勉強したことが理解できているかを調べるペーパーテスト」ということになるだろう。

このTIMSSでは、対象科目の学習に関する意識(「理科の勉強は楽しい」、「算数が好き」等)も併せて調査されている。我が国の子どもは、この意識面が、きわめて深刻な状態にあることが明らかになっているが、このことは、学力低下問題に関心・意欲の視点から考えていく際の裏付けともなっている点で、重要な意味を持つものと言えよう。

次に、OECD-PISAだが、こちらの趣旨は、「各国の子どもが、将来生活していく上で必要とされる知識や技能を、義務教育終了段階でどの程度身につけているか」を調査するものである。つまり、「学校の教科で扱われているような一定範囲の知識の習得状況を超えて、身につけた知識や技能を積極的に活用しながら、自らの将来の生活に関する課題を解決していく力」を見定めようとするものだ。

対象学年は高校1年生で、

国語、数学、理科に相当する内容が出題されている。

率直に言って、我が国の子どもは、このPISAで出題されるような種の問題に対して弱さを露呈してしまっている。

それは、学校での学習内容を超えたところで考え、回答していかなければならないからかもしれない。回答状況を見ると、問題文をきちんと読み取れていなかったり、設問が難しいと感じてしまうと未記入や空欄にしてしまうという傾向が見られる。これが、全体の点数を下げってしまう一つの要因だと言われている。

ここまで、2つの国際調査の概要を述べてきたが、学力という点でこれらからどんなことが見えてくるのだろうか。

単純化し過ぎなのかもしれないが、TIMSSの方は、およそ学校での学習成果である知識や理解の実態を捉えようとする調査であろう。これに対してPISAは、未知なる課題に果敢に挑み、知力を尽くして解決していく、いわゆる思考力や判断力などに重点が置かれている。

となると、両調査が共に学力測定を明言している以上、学力とは、「習得した知識や技能」の側面と、「思考力や判断力、表現力」の側面の両

方ということになる。つまり、それらの総体が「学力」として位置づけられるわけである。

こう述べてくると、「なんだ。そんなの当たり前じゃないか！」とお叱りを受けるのかもしれない。しかし、学力低下が声高に叫ばれる今日だからこそ、これらの要素とその総体を「学力」と位置づける、学力に関する議論の原点をここで確認しておきたいのだ。

この立場を、第2番目の学力のとりえ方として、ここで明記しておくことにする。

### 3 「学力」をどのように考えるべきなのか？

学力にまつわる昨今の状況や、その意味内容がおよそ明らかになってきたところで、そろそろ専門家が考える今日的な定義を確認しておく必要があるだろう。

さて、その学力の定義であるが、結論から述べてしまうと、専門家の間でもきちんと定まってはいない。

ならば諸外国では…、というところで西欧に目を転じてみると、この学力に対応する語が見当たらない。およそ該当する用語に Academic achievement (直訳では「学問的な到達度」)があるとい

う程度である。つまり学力は、かなり日本的な特有の意味合いを持つ用語<sup>6)</sup>なのである。

我が国固有の用語なら、むしろ定義がしやすいようにも思えるが、実際にはそれがなかなか難しい。その理由をいくつか紹介しよう。

一つ目は、学力の測定可能性という視点である。先の国際比較調査のように、ペーパーテスト等で測る事ができるものとして定義する立場と、学習の成果をより広くとらえ、「測定可能なもの」と「測り得ないもの」の双方を想定するという立場がある。

前者の立場であれば、当然、何らかのデータで表現できることになるし、データそのものが学力の傾向や特徴を表すことにもなる。

これに対して、後者の立場になると、測定可能な部分に下降傾向が見られても、それが直ちに子どもの学力全般の下降を意味するものではないという立場に立つ。だから、計算問題が解けなくても、漢字の読みが間違っただけでも、それだけで大騒ぎしたりはしない。

定義が定まらない2つ目の理由は、学習の結果による到達度(まさに、Achievement)である)なのか、これからの

学習可能性を含む力なのかという視点である。「学んだ(結果としての)力」なのか、それらの力を含み込んだ上で「学ぼうとする力」なのか、と言いつつ換えてもいいだろう。

そして、この2つの視点は、密接に関連する。学習の結果としての到達度や達成度としての学力は、学ぶことによつて得た知識やできるようなことになった事柄であるので、測定できる可能性が高い。これに対して、学習の過程における意欲や学ぼうとする姿勢を学力に含める立場では、すべてをとらえることは不可能という立場と見てよい。

このような立場の違いは、それぞれが背景を持っているものなので、ここで早計に結論を下せるものでもない。だが、そのような中で敢えて私見を述べるならば、今日的な「学力」とは、子どもの学びの過程から結果に至るすべてに関わり、それらを説明できる概念であることが、最もふさわしいように思う。

学ぶきっかけを創り出す意欲や関心。学ぶ過程での思考力、表現力、判断力。そして、結果として身に付いた知識や技能。さらには、達成感などの心情面までをも含み込んで、「学力」と位置づけるべ

きではないだろうか。

先にも一部述べたように、近年の子どもの学びに対する忌避感<sup>7)</sup>や、「新しい荒れ」と言われる現象の広がりは、「学んだ力、できるようなことになった力」という狭い学力観でとらえることの無力感を露わにしてしまう。なぜなら、学力以前の問題として、落ち着いて学ぶことができないとか、学ぶこと自体を放棄してしまうという現状があるのだから。

そんな状況が広がりつつある現代だからこそ、「私もやってみたい」という学ぶ意欲や、「ちょっと面白そうだなぞ！」という興味・関心、また、近年注目されている自己有用感や自尊心(「頑張れば、自分もできるんだ」という感覚)、自己効力感(「きっとできそうだ」という感覚)などにも光を当てながら、情報化社会の今を生きる子どもが、「学力」を規定していくことが、求められているのではないだろうか。

この立場を、第3番目の学力のとりえ方として、ここで明記しておきたい。

### 4 実践の現場をもう一度見てみよう

ここまで、専門家や社会一般のとりえ方を中心に、学力の内実を探ってきた。しかし、子どもの学力の育成・向上に日々直接的に携わっている、学校現場の視点を置き去りにしたままでは、学力の議論も十分とは言えない。

よつて、次に、学校現場が育てている(※ようとしていない)学力について、大まかではあるが紹介しておこう。

学校で育成を目指す学力は、基本的には「知識・理解」、「技能・表現」、「思考力・判断力」、「関心・意欲・態度」の4観点(国語のみ5観点)でとらえられる能力である。

これは、子どもの通知表に記されている教科毎の観点別学習状況の記載欄に対応するものである。およそ馴染みもあるはずだ。

この4つ(あるいは5つ)の観点は、平成元年度の学習指導要領の改訂に併せて、その重み付けのようなものが変更され、併せて「新しい学力観」というキーワードが登場した。つまり、それまでの

「知識・理解や技能」重視の考え方から、「関心・意欲・態度や思考力・判断力」重視の考え方に変更が加えられたのである。それは、言うまでもなく、時代や社会の要請に添ったものと考えることがで

きよう。

しかし、4観点そのものは今でも変わってはいない。まさに、学力のとらえ方そのものが不変であることを示している。

遡って、前節で筆者は、これからの学力に対して学習意欲や興味・関心、自尊感情や自己効力感等の心情面をも含み込んだ、トータルなとらえ方に立つ必要性を指摘した。この事が、学校現場での育成や評価において、今日、十二分に意識されているかどうか、正直なところ気がかりではあるが、ともかく、考え方としては従来の4観点の延長線上にあって、学校ではそれらの4つの要素の育成に、これまででもこれからも注力しているのだということ、我々には十分に理解しておく必要がある。

学校の荒れが表面化した時代には、「意欲・関心」が取り沙汰された。そして、学力低下が叫ばれると、今度は、「知識・理解」が注目され始めた。そんな風潮の中で、一般市民の学力に対するとらえ

方も、大きく揺れ動いているように思われるからである。

先に紹介したような種々の国際比較調査の結果やデータは、当然の事ながら真摯に受け止め、改善の手だてを探らなければならぬ。しかし、それに安易に乗じて学力を一面的にとらえたり、過度に危機意識を煽ったりしてしまうと、本来私達が読み取るべき教育「実践」の豊かさを、矮小化してとらえる危険性をはらんでしまうのではないか。

筆者を含め専門家と言われる人々は、学力なり教育実践なりについて学問や研究の視点から語ることで、その職責の一端を果たそうとする。しかし、時にそれは、学校現場や子どもという社会や人間と深く向き合わないところで、「教育論」だけを振りかざすことに繋がっていつてしまう。

学力観の再確認とトータルな育成など、学校現場が改善していかなければいけない問題も、少なからず存在している。しかし、それだけを問題にして改善策を重ねていく前に、もつともつと多くの人達

が教育実践に関心を向けるべきであろう。傍観的な批評に終始するのではなく、今、ここに生きる子どものありのままの姿を見ること、必要なものは何かを実践の具体の中から明らかにすること。これこそが、今日の課題ではないだろうか。

このことを、本稿の趣旨きながらにやさしい表現に置き換えるなら、まずは、「もつともつと子どもの育ちや学校での学びに関心を持とう！」ということになるだろうか。そして、行事や授業の参観等を通じて、「子どもの日々の育ちを広くとらえていく」ことから始めたい。

問題が山積している時期や時代であるからこそ、実践の現場に学ぶ重要性が際立つように思える。

### 5 結びにかえて： 市民力の基盤を創ること

今や「学力」は、知識や技能でとらえるだけでは不十分な時代である。「受験に対処するためには…」と言うけれ

ど、大学入試だって高校入試だって、生徒数の減少により、今や全入の(=選ばなければ、全員が入学可能な)時代に入りつつあるのだ。となると、真に学ぶ意義を自覚でき、実際に学んでいくこと、学ぼうとする意志そのものが問われ、また重視されるのである。

本稿では、学力に対するとらえかたを段階的に三つで特徴づけるなかで、今日の子どもの状況に即した「学力」とらえを提起してきたつもりである。意欲や関心、自尊感情や効力感等の心情面を重視することは、子どもの「知の復権と再生」に欠かすことのできない視点であるし、生涯にわたって学び続け、この社会に主体的に参画し、新しい世代を創造していく市民一人ひとりの基盤を創り出す源泉と成り得る点で、その意義は極めて高い。

21世紀を生きる子ども達には、是非このような「学力」を身につけてもらいたいと切に願うところである。

#### 文献

- (1) 岡部恒治、戸瀬信之、西村和雄「分数ができない大学生 ―21世紀の日本が危ない―」、東洋経済新報社、1999
- (2) TIMSSについては、文部科学省のホームページにその概略が掲載されている。  
(<http://www.mext.go.jp/bumen/london/16/12/04121301.htm>)
- (3) OECD-PIISAの結果については、以下の文献が詳しい。  
国立教育政策研究所編「生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査 (PIISA)」ぎょうせい、2002
- (4) 2004年12月18日の朝日新聞朝刊の掲載記事(資料1を参照)
- (5) 佐藤学「習熟別指導の何が問題か」、岩波ブックレット、2004
- (6) 安彦忠彦「学力論」、「戦後日本の教育理論(下)」所収、ミネルヴァ書房、1985
- (7) 例えば、以下の文献をあげることが出来る。  
佐藤学「『学び』から逃走する子どもたち」、岩波ブックレット、2000